

## 参議院常任委員会調査室・特別調査室

論題	視点「党首討論に吹く新しい風」
著者 / 所属	金子 真実 / 企画調整室
雑誌名 / ISSN	立法と調査 / 0915-1338
編集・発行	参議院事務局企画調整室
通号	481号
刊行日	2026-3-3
頁	2
URL	<a href="https://www.sangiin.go.jp/japanese/annai/chousa/rip_pou_chousa/backnumber/20260303.html">https://www.sangiin.go.jp/japanese/annai/chousa/rip_pou_chousa/backnumber/20260303.html</a>

※ 本文中の意見にわたる部分は、執筆者個人の見解です。

※ 本稿を転載する場合には、事前に参議院事務局企画調整室までご連絡ください (TEL 03-3581-3111 (内線 75020) / 03-5521-7686 (直通))。

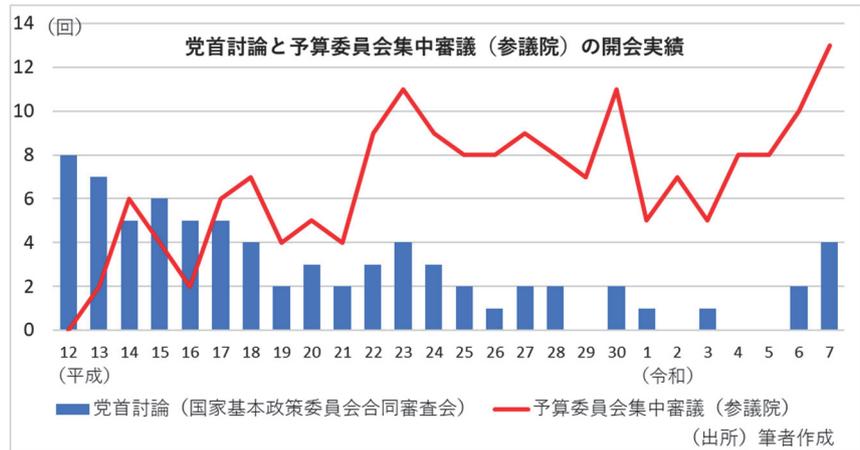
## 党首討論に吹く新しい風

国家基本政策委員会 専門員

かねこ まみ  
金子 真実

平成12年に導入された衆参の国家基本政策委員会は、両院の合同審査会を開き、国家の基本政策について党首討論を行う異色の委員会である。総理と野党党首が互いに国家観を語り、各々の資質や政権担当能力が問われる場とされ、討議時間は45分と短いTV中継される。ただ衆参で足並みをそろえ開会を目指す必要があり、本会議や予算委員会との調整が行われることもある。そこで、双方向の政策論議の場である党首討論と、総理出席にTV中継ありと開会条件が同じで、時に政権追及の場ともなる参議院予算委員会の集中審議の、この四半世紀の開会実績の趨勢を比べてみる。

導入初期には党首討論は活況を呈する。小泉総理(当時)と岡田民主党代表(当時)の自衛隊の海外派遣をめぐる応酬等、党首対決は世論に話題を提供した。その後、平成19年の参議院選挙で衆参にねじれが生じ、平成21年及び24年と二度の政権交代が起きると、この間集



中審議が開会数を伸ばす。与野党が激しく争う過程で、政権追及に多くの質疑時間を確保できる集中審議が圧倒的に推されたことが窺え、平成24年以降もその傾向は衰えない。一方党首討論は伸びず、平成30年に党首自身が「歴史的使命は終わった」と発言して以降開会への熱量は冷え込み、令和5年には国家基本政策委員会を廃止する法案が提出されるに至った。過去の実績は、集中審議の際だった趨勢を物語る。

ところで昨年党首討論は4回の開会を実現し息を吹き返した。背景には国政選挙が続いた政治状況があり、既に集中審議の開会数も跳ね上がっているが、今後は党首討論の更なる伸びを期待したい。SNSは国民と政治の関わり方を変え、特に若年層の政治への関心を高めたといわれる。実際投票率は上がってきている。党首に着目し推すのが今時の政治参加スタイルならば、党首力を競う党首討論の場はもっと注目されて良い。また国家の先行きに不透明感が漂う時に、与野党が国家観を論じる場が国会にあることは極めて重要である。ネットでは真偽が定かでない情報が飛び交うが、党首討論は公的場で記録が残る。討議時間を増やす等の改革を行い、与野党で積極的に政策論議の場として活用すれば、国民と政治をつなぎ民主主義を支える場となるだろう。党首討論には、今新たに追い風が吹いている。